研究発表会報告

佐伯の近代文学を彩った三人

阿南卓・加藤勘助・工藤好美

古川　敬
（会員　鶴岡町）

放浪の俳人山頭火と佐伯の縁を調べていくうちに、大正から昭和の初めの佐伯は、大正ルネッサンスの申し子と呼んでよいほど文化や社会体育などあらゆる面で、活気にあふれた町だったということが分かってきました。そして、その中心に阿南卓（あなみたかし）という人物がおり、阿南の指導で佐伯から多くの若者が有意な人材として育っていったことを知りました。

明治の末から太平洋戦争終結の頃までの半世紀、阿南卓は、佐伯の教育文化、社会教育、そして地方政治の場で常に佐伯のトップリーダーとして活躍しています。

阿南の信念はひたすら佐伯に対する郷土愛でした。

そんな阿南の生涯を辿りながら、彼が育てたともいえる加藤勘助、工藤好美について記していきます。

阿南卓は、明治十九年佐伯藩の家老職を務めた齋藤家の三男として生まれます。五歳の時に親戚筋にあたる阿南家に養子に入り、以後阿南を名乗ります。

佐伯高等小学校を卒業後、勉学に優れた阿南少年は、当時佐伯には中学校がなかったため臼杵にある臼杵中学に入学します。ここで事件がおこります。子供の頃から正義感の人一倍強かった阿南少年は中学一年の時、今では原因が定かではありませんが、先生と大喧嘩し臼杵中学を退学してしまいます。

その後心配した両親の勧めもあり、また勉強を続けたいという阿南の強い意志もあり、明治三十二年阿南は延岡中学に再入学します。そこで阿南は後の阿南の人生を決定づける人物と出会います。

その人物は、後に歌人として名をなす若山牧水です。入学当時は阿南は剣道部に籍を置く武道系、体育会系の武骨な人間でしたが、牧水と出会い、牧水の文学への情熱に影響され、自身も文学に目覚めます。二人は意気投合し、二人を中心に校内に文学雑誌「曙」を創刊します。

延岡中学での五年間で阿南卓の文武両道の素養の基礎

が養われました。牧水や良き友人たちと巡り合い、充実した中学校生活を送った阿南は、明治三十七年牧水とともに早稲田大学に進学します。

阿南は晩年、延岡中学での牧水との交流を懐かしみ、その思い出を短歌にしたためています。

卒業の　別れの夜の
　酒盛りに　手をとりてなく　牧水なりき
やるせなき　寂しさおそれ
　牧水は　酒のみてけり　旅ゆきてけり
酒飲みの　持病の一つ
　肝臓の　硬変症に　牧水はたふる
牧水の淋しかり屋に　時偶に
　思い出でては　さびしかりけり
繁ちゃんの　ふだん袴は
　紺褪せて　浅葱なりしが　瞼に残る

あのまま何事もなく臼杵中学を卒業したら、阿南の人生はまた違ったものになったことでしょう。

早稲田大学文学部哲学科に入学した阿南は坪内逍遥の門下生として勉学に励みながら、牧水らとともに短歌や俳句を雑誌に投稿し文学者としての力を養いました。

一方小学校時代から親しんでいた野球にも惹かれ、早稲田大学野球部の学生との交流を深め、野球技術の習得にも務めています。

当時東京では、野球は「野球害毒論」という論争が起きるほど盛んで、まだプロ野球がない時代、早稲田大学を中心にした大学野球が大変な人気を博していました。

早稲田で学んだ最新の野球技術を佐伯に広めたいと阿南は早稲田大学の野球部の現役選手を佐伯に招き高等小学校の野球部の生徒の指導をお願いしたりもしました。今でいう少年野球教室のようなものです。

また阿南は大学が夏休みになると帰郷し、近所の子供たちを集めて「おとぎかい」というお話の会を催しました。この頃から阿南の心に芽生えたのは「郷土愛」でした。阿南は早稲田を卒業すると、周囲からの就職の勧めを断り、郷土のために役に立つ仕事がしたいと佐伯に帰ります。

時は明治も終わり大正になろうかとしている頃、明治維新から半世紀を経て日本の国力も増し、大正デモクラ

シー、大正ルネサンスと呼ばれる新しい時代を迎えようとしている時代でした、東京で市民生活の大きな変化を体験した阿南は、郷土の発展には市民の教育文化の素養の向上と子供たちの知育体育の健全な発達が欠かせないと考えるに至りました。

阿南は帰郷するとすぐに「同人隊」という、今でいうボーイスカウトのような会を作り、体育を通じて少年の育成を図ることに情熱を傾けます。

佐伯市史には当時の様子がこう書かれています。

「阿南は自宅を開放し隊員たちの集会所にし、各種のスポーツに興じたり山野を駆け巡ったりして、心身を鍛練した。その指導方針は一視同仁であり、当時いまだに根強く残る封建思想の打破を狙うものであった。隊員たちは彼を「隊監、隊監」と呼んで、師ともあるいは兄ともして、慕いなついていた。「隊監」の名は隊員だけでなく、いつの間にか、市民の誰もが彼を呼ぶ呼び名となっていた。」

この同人隊は、二十数年にわたって存続し、中央や地方のあらゆる分野に優秀な人材を輩出しました。

阿南はさらに「同人隊」の活動をペースに、佐伯市民の社会体育の発展にも力を注いできました。特に野球の普及に努め、阿南の熱心な指導によって小学校から中学校そして一般市民まで野球に興じ、佐伯市民に初めて社会体育としてのスポーツの楽しみを伝えることとなりました。

この辺りの事情については、佐伯史談に寄稿されている山内武麒さんの「佐伯教育の揺籃時代」や「佐伯尋常小学校の沿革」「佐伯の野球」に阿南卓や阿南の理想を実践した実兄野村越三の活躍が生き生きと描かれています。

一方で阿南は佐伯市民の封建思想を打破し、教育文化の意識の向上を図るためには何をなすべきかを考えます。その結果、市民に様々な情報を提供し、知識の向上を図ることからまずはじめなければならないとして「新聞」の発行を思い立ちます。新聞という手段に着目したのは、佐伯出身で新聞の父とも呼ばれる矢野龍渓の影響があった事は想像に難くありません。

大正二年、実兄野村越三らとともに「佐伯自治新聞」を創刊します。自治という名前を付けたところに阿南の市民に向けた理想への強い意志が伺えます。大正五年新聞発行の経営も安定し、市民に阿南の意思が伝わったと考えた阿南はさらに広く市民に読んでもらえるようにと新

聞の名前を「佐伯新聞」に変えます。

佐伯新聞は、創刊から昭和十四年、日中戦争の激化に伴って物資統制が厳しくなり廃刊のやむなきに至るまでの三十年間、不偏不党、公正中立を信条とする格調高い新聞であり続け、佐伯市民の良識の象徴として愛されました。

阿南は自身が文学者になる道は選びませんでしたが、佐伯の文学を志す若者を強力にバックアップしました。それは、佐伯新聞が佐伯の若者が創作した短歌や俳句、小説などの発表の場になったのです。ものを書く人にとってそれを発表する機会が与えられる事は大変な喜びで、佐伯新聞という発表の場ができたことで、それぞれが切磋琢磨し力を蓄えていきました。当時佐伯が文学活動が非常に盛んな町として他市の人々から羨ましがられたということが語り継がれています。その背景には、佐伯新聞の存在があったことは間違いありません。

阿南の佐伯新聞によって育てられたのが、盲目の詩人と呼ばれた加藤勘助であり、昭和を代表する孤高の英文学者工藤好美でした。

加藤勘助は明治大正の初め佐伯地方で新傾向の短歌を始めた最初の人と伝えられています。勘助は明治二十四年五月一日、船頭町で加藤シャツ店を営む加藤平蔵・キタの間に三番目の男の子として生まれます。勘助の家は男三人兄弟で兄弟そろって学問の好きな頭の良い子供たちだったそうです。ただ、勘助は子供のころから躰が弱く、少し目も不自由だったので、母キタは勘助を心配し、人一倍かわいがったということです。

躰が弱く、目も弱視の傾向があった勘助は、佐伯から出て勉強をしたいという気持ちはありましたがそれは叶いませんでした。そんな満たされない日々を若き勘助は送っていました。

そんな時一人の若者が早稲田大学を卒業して佐伯に帰ってきます。阿南卓です。

阿南の家は西谷、佐伯新聞社の社屋は今の三余館のあたりで勘助の家と近いところにあったので、自然に行き来が始まったと思われます。

勘助にとって、東京の文化の香りのする阿南は幼い頃からの憧れの人であり、早稲田大学の教授である坪内逍遥や新進気鋭の歌人若山牧水などの文学者の話は、勘助の文学への関心を大いに刺激したに違いありません。

勘助はおそらく阿南の勧めもあったのでしょう「短歌」の道に進みます。勘助は若山牧水に近い歌人窪田空穂（うつぼ）が主催する「文章世界」に短歌を投稿し、短歌の指導を受けながら、明治四十五年佐伯で初めての短歌同人誌「うつくし」を編集者として会員八名で発行することになります。この短歌誌の表紙は大分中学を卒業したばかりの菅一郎さんが書いています。

勘助は阿南の期待に応え佐伯の短歌界のリーダーとして活躍するとともに、全国的な投稿誌である「文章世界」の中でも頭角を現しつつありました。

阿南は勘助の才能を惜しみ、佐伯新聞の記者として勘助を採用し、勘助に活躍の場を与えます。病弱で目が不自由というハンディーで悶々とした日々を送っていた勘助にとって、阿南卓との出会いは、まさに一条の光がさすそんな出来事でした。阿南によって短歌という表現手段を得た勘助は新たな人生の一歩を踏み出しました。

勘助は大正六年療養のため別府に滞在していた詩人木下利玄と出会い、利玄の紹介で武者小路実篤を知ることとなります。当時実篤は自身が提唱した理想郷「新しき村」の建設に邁進しており、勘助もその運動に共鳴し参加します。

日向地方に「新しき村」の地を求めた実篤は、大正七年勘助の住む佐伯を訪れ、そこから勘助とともに海路日向に向かいます。勘助はこの宮崎を走破する過酷な土地探しの旅で、以前より患っていた眼病が重くなり急遽九大病院で療養しますが、病状は回復せず失明してしまいます。

実篤は児湯郡木城町字石河内に土地を見つけ、大正七年新しき村は日向の里で開村します。

一方、失明した勘助は、夢であった「新しき村」での生活をあきらめ、洗礼を受け、牧師として生きる決意をします。

しかし、実篤は勘助の決意を惜しみ、勘助に「新しき村」への入村を勧め、大正九年実篤は自ら手を引いて盲目の勘助を「新しき村」へと招きます。「新しき村」での勘助は、実篤のよき理解者としてその掲げる理想の実現に力を注ぎます。盲目でありながらも農耕に励み、余暇には詩作を続ける勘助の姿に村民は厚い信頼をよせました。

勘助は、入村するとすぐに、佐伯新聞に「新しき村より」という文を寄稿します。これは新しき村の理念や新しき

村での出来事を佐伯の人々に紹介するものでした。この「新しき村より」には勘助のふるさと佐伯への想いと、阿南卓との深いきずなが感じられます。

新しき村で勘助は実篤と共に理想に燃え、充実した日々を送っていました。

しかし、昭和四年夏の終わりごろ、勘助は風邪をこじらせ、そのまま帰らぬ人となってしまいます。勘助の突然の死は、実篤をはじめ「新しき村」の人々に大きな衝撃と深い悲しみを与えました。

実篤は、「新しき村通信」の勘助追悼の号外を発行し、多くの人がその死を悼みました。勘助三十九歳、これから詩人として大きく花が開こうとした矢先のあまりにも早い別れでした。翌年、実篤は勘助が発表した多くの詩を編み「加藤勘助詩集」を刊行します。

勘助の突然の訃報を知った阿南は、勘助が弟のように可愛がっていた和泉利郎が綴った「勘助兄の想い出」と題した追悼文を掲載しその死を深く悼みました。

佐伯新聞が育てたもう一人の人物それが昭和を代表する英文学者と呼ばれる工藤好美です。

工藤好美は、明治三十一年大手前で洋品店を営む工藤藤七とカツの長男として生まれています。今の佐伯タクシーの社屋があるところの隣に工藤洋品店はありました。

工藤好美は、まさに阿南卓の人材育成の代表のような人物で、佐伯尋常小学校に通い、阿南が早稲田大学の学生時代に子供たちを集めての「お伽会」に参加したり、「同人隊」の一員として山を駆け巡ったりしていました。加藤勘助と同じように、阿南の薫陶を受け、短歌に興味を持った好美は、阿南の紹介で加藤勘助が主催する短歌会「うつくし」に参加します。ここで阿南卓と加藤勘助、工藤好美は一本の線で結びつきます。好美は勘助から短歌の手ほどきを受けると、めきめきと頭角を現し、中学生にして佐伯短歌界の有力な一員になります。

勉学にも励んだ好美は、佐伯中学を優秀な成績で卒業、家族の期待を背に医者を目指し熊本五高に入学します。

医学を学びながらも、文学への熱い思いはすてきれなかった好美は熊本で、後に放浪の俳人と呼ばれる種田山頭火と出会います。偶然にも山頭火も阿南卓と同じ早稲田大学で学び、坪内逍遥の門下生でした。さらに山頭火は国木田独歩と同じ山口中学の出身ということも分かり、

二人は意気投合します。山頭火と好美との友情は終生変わらず、山頭火の死後も好美は山頭火から届いた葉書や山頭火から贈られた句集を大事に手元に保管していました。

山頭火の文学への熱い思いは、好美に強い影響を与えました。好美はこのまま医学の道へ進むか、文学の道を運ぶか思い悩みます。好美は「炭酸泉の香」と題して、佐伯新聞に寄稿、その心情を吐露しています。苦しい胸の内を、兄とも慕う阿南に何度も相談したに違いありません。

そして、遂に好美は家族の落胆をよそに、医学の道を捨て文学の道に進む事を決心し、阿南や山頭火の母校、早稲田大学へ進みます。歌人をめざし勇躍早稲田大学へ進学した好美でしたが、そこで作家としての才能の限界に気づき、歌人への夢を捨て英文学の道へと進みます。

英文学の研究を生涯の道と決めた好美は、その才能が一気に開花し、卒業論文が直ぐに認められ「ペーター研究」として出版されるという、英文学界が驚嘆する栄誉を受けます。

当時、朝日新聞で読者欄が新しく始まり、その最初に紹介する本としてこの「ペーター研究」が掲載され、好美の名前はさらに英文学界に轟きました。

その後も、工藤好美のひたむきな研究は、大きな評価を受け、台北帝国大学教授から戦後は名古屋大学、神戸大学、京都大学の英文学教授として活躍。大学退官後も英文学に対する研究意欲は旺盛で、平成四年九十四歳で無くなる直前まで、日本を代表する英文学者として活躍しました。

その英文学者としての功績は、三島由紀夫をはじめ多くの作家や学者に影響を与えました。

学生時代から大学の教授となってからも故郷佐伯への想いは変わらず、好美は折々に佐伯新聞に随筆を寄稿し続け、阿南との交流が続いています。

さて話は、阿南卓にもどりますが。

阿南卓の佐伯新聞は昭和十四年廃刊となります。

これからは佐伯の将来を担う子供たちの教育に力を注ごうと思っていた阿南でしたが、阿南の人生は、本人が思いもよらない方向へと進んでいきます。

昭和十七年の市議会で、阿南は佐伯の第二代目の市長に選ばれるのです。

これまで、町長、市長と言えば議員や役場の吏員か学校関係者が就任するのが、どこの市でも普通でした。阿南卓のように公職に就いた経験は全くなく。人生を一民間人として生きてきた人間が、突然市長に推挙されるというのは全国でも類のない驚くべき事だと思います。

それも阿南が市長に推されたのは太平洋戦争の戦時下という未曾有の困難な時代でした。そんな時代を佐伯市民は阿南卓に托したのです。阿南がいかに佐伯市民から慕われ、尊敬されていたかが伺えます。

戦中戦後という大混乱の中、阿南は上からの権力に屈せず、清廉潔白、ただ一途に市民のため、郷土のために己の信じるところを貫きました。

昭和二十一年市長の座を退くと、その激務のため体調を壊し、阿南は床に就くことが多くなり、昭和四十年この世を去ります。

今は東京に住む阿南の次女の方に、父卓の思い出を尋ねると「父はいつも佐伯のために、佐伯のためにと言っていました」と語ってくれました。

また「終戦も近い日だったと思います。家の玄関に軍服を着た青年が二人たっていました。父が用は何かと尋ねると、自分たちは明日特攻隊で出撃します。一晩だけ市長のお宅に泊まらせてください。と言うのです。父は「あがれ」と言うと二人を座敷に通しました。

母は慌てて食事の用意をしていたのを思い出します。父とその兵隊さんが何の話をしたかは分かりません。ただ次の日の朝二人を見送る父の誇らしそうで、でもどこか悲しそうな顔を今でも忘れることができません」という話をしてくれました。

阿南は二人の青年の後ろ姿を見ながら、その脳裏に是まで自分が慈しんできた多くの佐伯の若者たちの姿が浮かんできたのに違いありません。

阿南卓、そして彼が育てた加藤勘助、工藤好美に貫かれている信条は郷土愛でした。

遠くにいても近くにいても、三人は常に佐伯を愛していました。

佐伯の近代文学を彩った三人、阿南卓、加藤勘助、工藤好美、佐伯市民の大事な宝として、いつまでも記憶に留めておきたい。そんな思いで今日も城山を眺めています。